



敬呈雜誌
 信集

増
 775
 180



曾
773
180

駿臺雜話卷五目錄

信集

月身世に形見

遍照る黒うし

詩文批評品

六義乃沙汰

多浅言賈

曇陽大所

言ハ身此文

丸物人と移り

離騷の秘事

世とてく刃とすくは

俣歌に感負の益あり

作文を讀書よりあり

文章に盛衰

寸鉄人と移り

一日に澤

年よら



士子試筆の詞 附

駿臺雜話卷五

月を世々の形見



今年もや中邊おまはいろく秋のけきさむらそ秋次也
七乃をさやあはちと久く箱のるのゆはけがの老北村
くもえ東かーさあつ孫同じさくあまた常々例の人を打運
て身一々又もよひらんく地人とせふ秋箱さあそ今言を
月七う一唐酒中めちらん志んく一箱を控く一箱の心といく
てししくたきさあははくく者所いさあく信淡の海やりく繁
社の家人やうくんゆく丸あぬまそよあねもさうーこれたて
空山一々流若は致く具く入ておらんー其中よ入立と停
て青天有月来幾時我今停盃一問之李白詩とさう
くおたにーさふと文ゆるも御もつけく人襟明月不可得

子よみと後後しははむの切たそく母し申はすは終
終と習ふは母の報恩とすいふは人なれといはれは終
感く天に育すは八分あるは是を言ふなり一表ていひ
角しちのと思ふはそとすり教ありしと之ぬもはる
しは也深き盛衰記しはるるきくはるる 頼教記よむ連て
母し木九穴の記しはるるきくはるるすそよ日教よ人
とすり母誓の中は佛の小像といひはるるし首と教度人時
た教のそあるきくはるるきくはるるすそよ日教よ人
弟しんが公なる事の人みりりき半あるや仏ともあては
しよとあすしんをりす夫あてとさるるはるるし
まはるるすもたふししはるる佛とはすもしはるるすえ
はるるしはるるすもとて人ら羞恥の人と固有すし事とす
す

これ公編也と毎とらひてかたかしとをさるる可しらむ
はるる頼教を教よとて能てさるるしはるるはるる
つらむのしはるるすもとてかたかしとをさるる可しらむ
す

すもとて公編也と毎とらひてかたかしとをさるる可しらむ
はるる頼教を教よとて能てさるるしはるるはるる
つらむのしはるるすもとてかたかしとをさるる可しらむ
す

翁自くは詩を感ずるは是より先は漢も沙彌しけり月
も何候と亦も歌よあけられたるは各々いふ事ありぬ

詩文の評云

他日往くは亦も事なせしる各教同半流て詩文の後よおふり
此も詩をいして詩文をその同の厚半也其ハ各勢もを依りおとせ
藝も依りお類とややたしとてハ翁の詩文の論と亦多くなりには
翁之詩の半と編して詩を三百篇はにりり教すれ及らん漢
魏之後の詩も文理悠暢意思淵永しして風雅の教と失くは
りて蕭統の文選よのする古詩十九首と詩く樂府歌行の詩と
よとて知たしとるはハ朝よして綺靡とさそハ浮華といふ
るは凡雅の體をるはハ多し唐且て李杜と極う後いつハ朝
の厚ありと一述し一古よ凡と推具せしとる今よとて詩と多

今と唐詩とよあはれりて盛唐の詩も古とて半をいしとて
凡雅とて中人信と本ありて凡雅の殘膏剩馥ありて
くく人よと感ずりの好もとさそハ其の性情も亦亦たて唐詩と推し
きよのよけり米の司馬温公杜甫國破山河在城春草木深感時
蒼澹淚眼別鳥驚心いし詩と論して古の詩も意在言外
と貴ふ山河在といハ解物也其半をいし一草木深といハ人なき
事とて一もさるも平時嬉むと物とてそよとてそよは我用て
此一めは當時流弊の信いもたててさしとて又此の之聲も唐詩と
論れとて國凡係衣燕、頌人米永教の篇しとて言外之窮の
感も後世も唐人の詩のいしとてさしとて溪水悠々春自來といハ
懐友といしとて懐友の名もいしとて潮打空城寂寞回といハ
真七といしとて真七は感言のいしとて凡雅の體と推しとて

けい子の神ゆき其の神とて之を少く唐の詩とて之に
李白大原早秋と賦して霜威出塞早雲色渡河秋夢
繞邊城月心飛故國標として類の詩を雄壯の氣として
杜申江亭と賦して水流不競雲在意俱遲寂
寂春將晚飲物自私として類の詩を深をの意として
杜甫王淮日落江湖白湖来天地青として杜甫吳楚
東南折乾坤日夜浮として孟浩然微雲渡河漢疎雨滴
梧桐として柳宗元壁空殘月曙門掩候虫秋として馬雅
の初として不群の思を意を深を宋人のいなり旅心の京を
写して目如あはれとして李賀の意を念くとして杜甫秋
風の他とてや少子とて厚の詩も乞う例として杜甫秋
風の八首と昌黎宮初の諸篇と其體をとりて多し各其

沈と兼ていふてことと兼ていふてことと中唐とて晩唐と
して韋蕙州柳儀曹とて昌黎と文章千古今と卓絶すとい
ふ其詩風雅とてことと兼ていふてことと孟郊賈島寒瘦元稹
輕浮白居易淺俗李高隱僻淡温庭筠媚艷として詩の厄と
してことと兼ていふてことと盛唐とて中唐とて晩唐と
してことと兼ていふてことと吳格としてことと兼ていふてことと
律と拘と高白とてことと兼ていふてことと吟詠とてことと兼ていふてことと
一鄭谷雪と賦して江上晚來堪畫處漁人披得一蓑歸
鳥として東坡評して乞村字中此詩中として柳子厚他は
千山鳥飛絶萬徑人蹤滅孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪として
以て別格の事として鄭谷詩を巧して俗耳を諷ふとして
柳子厚詩としてことと兼ていふてことと鄭谷詩を巧して俗耳を諷ふとして

披眼力此なきと覺てしを過したるを細雨湿衣着不見閑
蒼落地聽無聲しつとを盧綸詩之合と勝然しと佳句を
人傳ふれしとくしひも勝るれをくは詠するは宋
此宿志南の露衣欲湿蒼蒼雨吹面不寒揚柳風しと此等清麗
剛眼咀嚼して味ありと盧詩をほむをぬしと志南の詩を
朱文公の稱し給ひしとやとれしとひしと其後擊壤集と
よえて梧桐月向懷中照楊柳風來面上吹しとふとん又一
等從容の氣象ありて有さのそとれえ(る)と詠し凡流人豪
とやたしけし人の他句調景致しとれしとあのはしと之はまきこ
けり盧は辞へきしと志南康節の信とまきこして信よ言下あり
少くもしとけし詩を辭と拘束ハ理屈は磨て味なく信よあはすれ
意思と念く味ありとまきこはしと初子の人評の雅俗とを以て

よはし信の由はまきこしと今世の詩と賦の人のえらまきこ
目より唐詩とを何れもよめりて多く之念と先だててこり俗
勝るも多しとよしひの詩は巧なりと詠諧とまきこし信よとれし
禪流とよしと信よりよし一種偏曲無實の命なりとあまの念
むく樂府古詩の辭と剽掠しと古き傲りしと家流の介一
代詩ありしとまきこしと信よ其詩とよしと根柢流弊の文
理と信よ浮薄のそとと斷梗のこしと文字の怪しと一と信よ
其黨の命を相作社しとと信よ文雅風流しとあまの信よの命
文雅風流なる物とひしとよしと信よ文雅風流をよしとま
しと信よまた文雅風流なる物と信よ其信よ信よと信よと人
たりしと信よと信よと信よと信よと信よと信よと信よと信よ
あまの信よと信よと信よと信よと信よと信よと信よと信よと

よあ句の爲の尾としていひ就して下を下の句であらば其の
其の今もあはれなく自ら痛く老くればとむけたり

あしてはれや難波はしゆくやくまのゆくも我を老よけ
れらるゝるんや我の世をみりていとふさび

あゝ鬼のすししく入は裏あ此にのきすこころも我かな
アと先とよあれ皆よあ句の外のよあとしていひおいて下の
句もくふさびといふも其の體よかたさといふおのこも
風雅頌のころもはく徳法真の體していひおのこも
すは給のよあ我とゆく考へて先歌のよあといふさびけく
詩のよあ我かす給あて給くかくいふさびこれ詩のよあ我を給の
よあ我のよあ我を歌のよあ我と給あえくあを海すくは傳歌
と隔るゝ官職律令等の事よくと又はく我をく漢唐とほな

ひて建ちた事よえ給て名實齟齬たる事多し志ありと傳書と
いへく人多く強く去年合して其誤と信せんあはくは公道
あはれ信以傳信疑以傳疑といふ志いひて是れのもよあ
法す教しや明達の語をいふ(是)

此文を讀書あり

後教日ある法客來會せしむ箱むひく前日傳歌唐詩の事
くほく承りて其詞と似たり但傳歌を我等も此のあはくまをぬ
事よあ必しも自らもむもなむいふも自らも此れは
古詩と吟詠して其懐をきよすなり是ぬ一たる文章はそま
とを多しひゆるく多し今聖賢の書とよくは文章よあを來
る事よあは文章の法よくして其其纏るる世のあはく
其義と給り事よあはくは其とれも辭をすれのこしは

よければ天授の材とてこれより讀書方をも得らるなり今吾黨の
學を文辭と考へせしむる必しも文章家と云ふ人より得る可く常
用する辭を以て事のつけぬ物と考へしは是も古文辭と云ふこと
ひし今の後生多くを躁進して久しく潜思讀書と云ふこと
常々銳志著作して多し自ら文と名を以て作者の指摘を求ふ
このこと思ふに古くは指摘の益を大體文字程の中より中
よ三所の疵病と改め又を彼者於此と云ふは亦今容易に
て不成體の文字とてこれと求むる多し六家名のとて結構
次第と云ふ材木等倫と云ふ或を堂とほし一室と云ふ或を
林と採り一椽と棟とせしむるは古くは亦なりし一大通と云
ふといふ脩神すといふや多し字と室を以て候と云ふは是も
今後生は文字と指摘すべし亦かくのいふ一兩を以て候と云ふ

あるものなるを爲すは後生といふこと先軍と下されその他の功
讀よと云ふは古文辭の覃思せよといふにして必古人の氣を
古の化を以て候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ
其のむと云ふなりと先儒といふを著他とて候はれ廢せよと
候はれ七八の力に讀よと云ふは二これかと候はれ申なり候は
月と經年と候はれ韓柳歐蘇やふはれ候はれ相懸し候はれ
文字と候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ
を候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ

多錢善買

守中のはた文章此字を讀むと候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ
候はれ文章此字を讀むと候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ
韓退之進學解の規とて候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ

行藏論古道經濟問嘉猷寄語世間客誰知塵外遊

まよふて迷ふ唱わしけれかて酒酣より酔を為し今すは

多しなれそのよふにけりた中よ世よのちを散樂此詩よ

よき命ありしに相其人よ西してやう肩よの影よを影

の月とくふけ擔瓦のまはるは不審のふと折はくこひ出

多と外のあもつとくこひけれおききておしよここひ

うもよ^中家方中の京氣とんぬるよまのりして江川來て

六出蒼埋三徑平忽聞白雪入歌聲市中縣酒酒家近

堂上閑書書快清玉樹玲瓏四隣合銀沙的皚一川明

嵇博何減山臨興莫厭留談到日傾

翁諸字ありしにけり律詩を文字のちひやとや家客て

しるふひきんえりくしち為するとも急せぬあつと二字をく京

歌とせを歌い念慮されあてり他の詩やく中をいよまももな

らく思ふとくししけり牙二句の平字かふくし若保くして三

徑のさしちくむしつめを促しけり二句の入字字眼

とも中たり流若の謡と白雪の曲はけりくのちの新入も中

之をゆりくしすむ句の合字もちく澤原の樹のむしつめを

中少くは六句の助字をよる若と銀沙はけり於的皚を明字

的實もく力あるよまえはつとんとつちある数字もくは也く

律詩韻字のたやしく他志のふる共もまよふとあその前の

法と他中者一あるとけり韻もたは共韻とさくしてその

てともひかたさつ韻も若くはまてくえくくは其韻も意

の字ちく其之句とすましくも中を其韻とす他韻少く

他中よりく唐詩の韻は用やると考てえはしるを

真の志と好しと爲し一歩の人の後行る伯玉の暮過と欲すこと未
能しとすこと年九の非とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
或るの自做て我過と用む事と形と有後相比して自後切
り本一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
切すこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
その成位の篤實光輝とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
せむむれせむれとすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
否とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
懈とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
あつた材カを多しとすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
而も一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
懈とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと

少壯不努力老大徒傷悲すとい陶淵明の盛
年不空来一日難再晨及時當勉勵歲月不待人とい之反
古の七は感懐と因すこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
進の志と振舞すこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
勿謂今日不學而有來日勿謂今年不學而有來年
日月逝矣歲不我延嗚呼老矣是誰之愆
は父本集もえんは朱子家訓不自棄の文をその教を朱子は
其他々又其後人の擬作も其意と朱子も託すこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
此の他もせよ言等も其意も明白なるおしおしおしおしおしおしおしおしおしおし
敬言するよりふふとすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと年一とすこと
大禹聖人乃惜寸陰至於衆人當惜分陰豈可佚遊荒廢
生無益於時死無聞於後是自棄也とい之をその者志と

云とんよおのぼりてあつてはしるもをりし

壬子試筆此詞附

日月送^{いづ}後^{のち}て白駒^{しろこま}の原^{はら}をすく密^{みつ}病^{びょう}日^ひに侵^かして黄金^{おうごん}の術^{じゆつ}
如^{ごと}く一^{ひと}つたふ馬^{うま}のよもひをまてありしと思^{おも}ひまをりしにじつ
老^{らう}のばををちあつていしを七^{しち}年^{ねん}あやみはの春^{はる}をさるぬあつて
ちんまてあつて身^みよ疾^{いしやく}疾^{いしやく}とほくもくもあつては能^{あた}はれぬやの
るり昔^{むかし}の董^{とう}生^{せい}とまふとまはあつてけしを春^{はる}の園^{その}を家^{いえ}する
もあつては園^{その}の牛^{うし}あつて朽^くつたる音^ねをゆての差^さとほ
秘^ひなる秘^ひなるよもいじつとまのふもあつてなありけるは伊^いれ
まもいじつとまのいじつとまの宮^{みや}とつたる甲^か斐^{はい}あつて後^{のち}米^{まい}の
道^{みち}とまのいじつとまの鄒^{そう}魯^ろの風^{かぜ}とまの韓^{かん}歐^{おう}の文^{ぶん}とまの邦^{はう}邦^{はう}と
ちとまのふも老^{らう}の秘^ひなる秘^ひなる一^{ひと}つたるもまの年月^{ねんげつ}ひはつて

そのりてかしてはかたを考^{かう}つて盛^{せい}衰^{すい}榮^{えい}枯^こをよめりふをほ友
とやいしん^{しん}沢^{たく}やいしん^{しん}神^{しん}一^{ひと}高^{たか}貴^きを信^{しん}する雲^{うん}のこく^{こく}禍^{わざはひ}福^{ふく}併^{あひ}する
徑^{かみ}のいしん^{しん}といしん^{しん}のりよまの半^{はん}あつて中^{ちゆう}も多^たく吾^{われ}輩^{はい}の
建^{けん}治^ちの三^{さん}個^ご五^ご帝^{てい}の及^{およ}びて五^ご帝^{てい}と並^{なら}びはる古^こ々の及^{およ}びてれ
とまのいしん^{しん}かしてはかたを考^{かう}つて作^{さく}る業^{ごう}をいじつとまの
秘^ひなる秘^ひなるよもいじつとまのいじつとまの利^り欲^{よく}を
まもいじつとまのいじつとまの風^{かぜ}俗^{じやく}日^ひにちやく申^{まを}くしは
いじつとまのいじつとまのいじつとまの一代^{いちだい}の風^{かぜ}教^{きやう}を維^い持^ぢせんとす
いじつとまのいじつとまのいじつとまのいじつとまの批^ひ評^{へい}の樹^{じゆ}を撼^{あざ}く^く^く^く^く
海^{うみ}と奥^{おく}ひしるもいじつとまのいじつとまのいじつとまの吾^{われ}儒^{にう}介^{けい}
内の事^{こと}れれいしんと度^た介^{けい}の意^いをいじつとまのいじつとまの老^{らう}師^し翁^う
信^{しん}と秘^ひなる人の好^{この}く実^{じつ}況^{きやう}を肆^しする一^{ひと}を他^た道^{だう}を執^{しつ}するに義^ぎ

駿臺雜話五冊

文化十二乙亥歲二月十二日

三月廿日

字之

中村直道

記此書ありて其の綴

中村直道

